

イカナゴ情報(2011年6月)No.1

平成23年5月31日, 稚内水産試験場調査研究部, Tel 0162-32-7166 担当: 板谷

宗谷海峡東方海域のイカナゴの昨年までの漁獲状況(サイズ, 年齢組成等)と今年の動向およびポケット周辺海域の水溫速報をお知らせします。

【昨年度までの漁獲量】(図1)

昨年度(H22年, 2010年)のオホーツク海における沖合底曳き網(枝幸, 紋別含む)によるイカナゴの漁獲量は2万2千トンで、H21年度より8千トンほど増加しました(図1)。漁法別にみると、オッタートロールが5.6千トン、かけまわしが16.3千トンと、かけまわしが大きく増加しました。

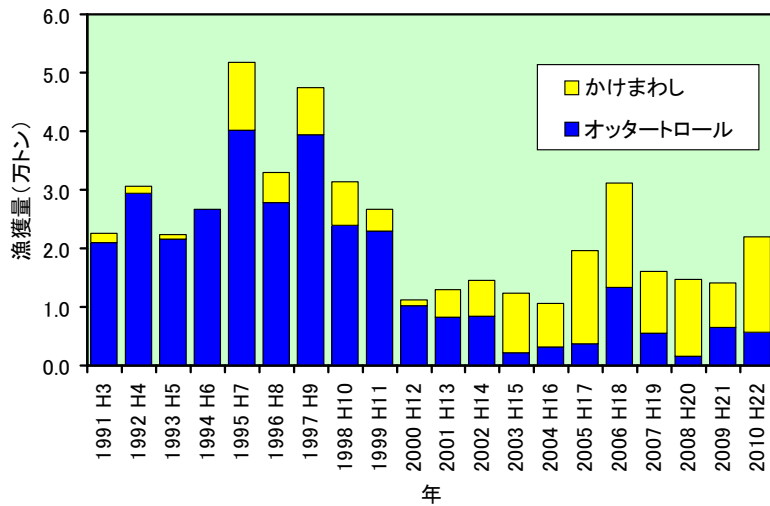


図1 オホーツク海のイカナゴの漁獲量

【昨年までの年齢組成と今年の動向】(図2)

昨年2010年(H22)の年齢組成は2歳魚(2008年級群■)が5割以上を占めました。この2008年級群■は、過去6年間で2006年(H18)の2004年級群■について2番目に多くなりました。また、後続の1歳魚(2009年級群■)も比較的多く加入したことから漁獲量が増加したものと考えられます。

■漁期前半の動向(6~7月上旬)

例年、漁期前半には3歳以上の大型魚が主体となります。今年の3歳(2008年級群■)は多いと予想されるので、漁期前半は少し期待が持てるかもしれません。また、2歳魚の多い年(2006(H18), 2010(H22))には、漁期の早い時期から2歳魚が漁獲されます。今年の2歳魚(2009年級群■)は、2008年級群■ほどではありませんが、昨年、比較的多く漁獲されたことから漁期はじめの動向が注目されます。

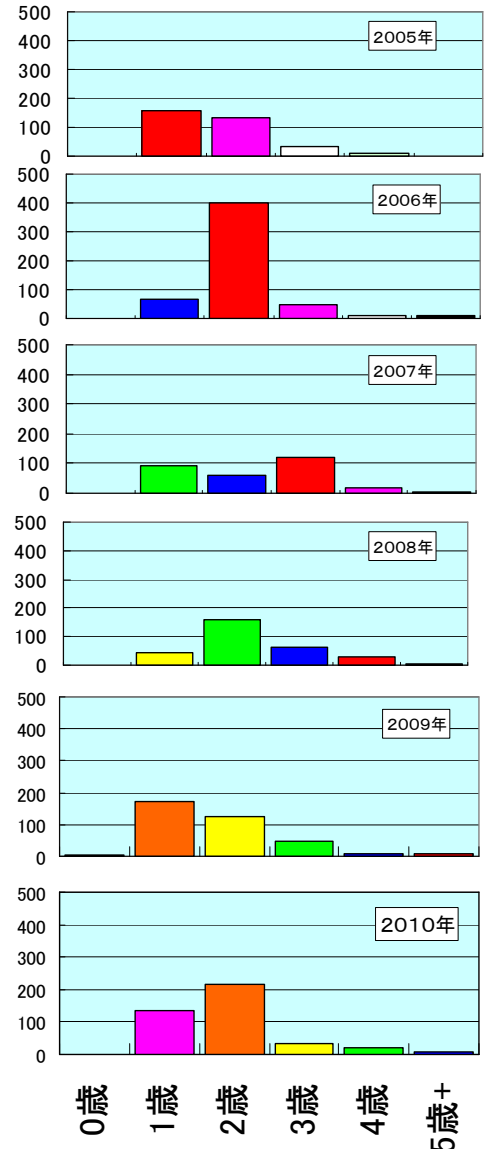


図2 年齢別漁獲尾数(百万尾)

■漁期中盤以降の動向（7月中旬以降）

例年，7月中旬以降は1，2歳魚の小型魚が主体になります。2009年級群■は比較的多く加入し，今年は2歳魚として漁獲の主体になると考えられます。量的な予測は漁期前半のオッター船の漁獲物組成を見ながら判断し（大型魚に混じって小型魚がいるかどうか），次回のイカナゴ情報（7月上旬予定）で報告したいと思います。

昨年は後半に小型魚（0，1歳）が見られるようになり，漁期も早く切り上げたことから，昨年の獲り残し（生き残り）が大きく成長して加入してくれることを期待したいところです。漁期中の漁獲物の標本調査を通じて注視していきたいと思います。

【漁場水温：調査船北洋丸による水温観測】（図3）

5月31日にポケット海域付近で北洋丸による水温観測を実施しました。ポケット海域南東の定点OA10の底水温は4.3℃で，昨年・一昨年よりも1℃ほど低い状況でした。表層にかけても4℃前後で水温環境はやや低めとなっています。

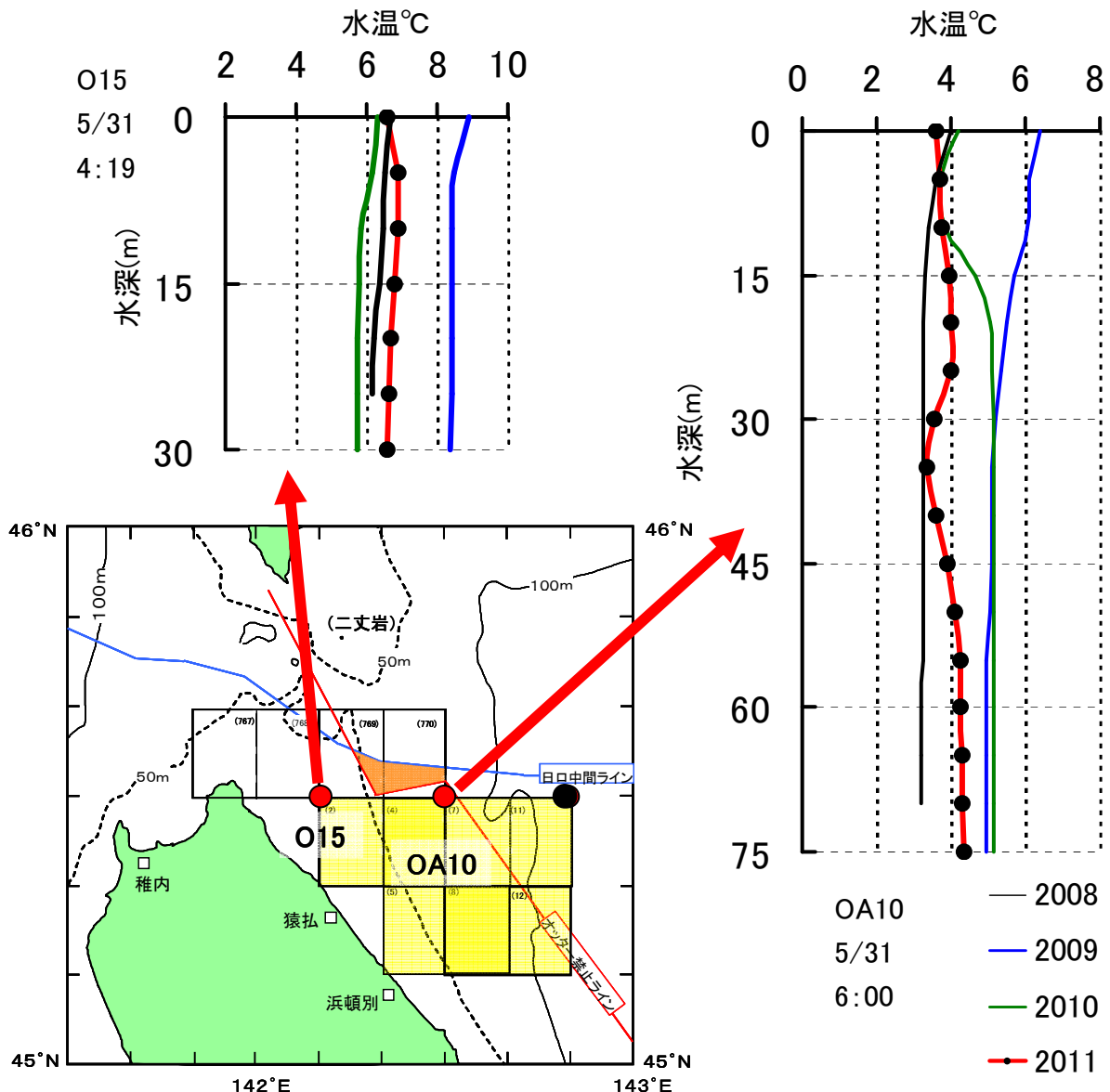


図3 調査海域詳細(上)と漁場付近の水温分布(右)